慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雅平本業平集の編纂態度：その詞書の生成過程と典拠資料について
Sub Title	
Author	田口, 尚之(Taguchi, Hisayuki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.9 (1988. 6) ,p.16- 30
JaLC DOI	10.14991/002.19880600-0016
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19880600-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雅平本業平集の編纂態度

――その詞書の生成過程と典拠資料についての考察――

田口尚之

一　序

現存業平集は四系統に大別されているが、そのうちの一系統である雅平本業平集[1]を除いた残りの三系統は、互いに近しい関係にあると考えられている。一方、雅平本は、その編纂態度（詞書・配列・採歌態度など）が他と著しく異なっており、現存業平集のなかで特異な存在となっている。

本稿は、その特異性の原因を知ろうとするものであるが、具体的には、まず、雅平本の詞書がその資料をどのように用いて生成されたものであるのかという問題に焦点を絞り、雅平本の編纂態度の一端を明らかにしようと思う。

また、歌が享受されていく場合、その歌自体は、いかに資料の影響を受けようと、原則として変えられることはないが、その詞書は、様々な資料の情報によって改変することが可能となる。本稿では、雅平本の詞書とその典拠になったと思われる資料の詞書または地の文を比較することによって、雅平本編纂に際して用いられた資料は具体的に何かという問題にも言及したい。

さらに、雅平本の詞書の生成過程については、編者の創意という視点からも触れてみようと思う。

なお、本稿作成に際して用いた主なテキストは、西本願寺本業平集は『西本願寺本三十六人家集―本文と五句末逆引き索引―』（本位田重美監修　岨博司編　昭59・7　笠間書院）、在中将集・歌仙家集本業平集・雅平本業平集は私家集大成、古今集・後撰集は新編国歌大観、伊勢物語・大和物語は日本古典文学全集にそれぞれよった。

二　現存業平集編纂における資料

現存業平集四系統の大まかな関係は、西本願寺本系業平集から在中将集系業平集・歌仙家集本系業平集がそれぞれ派生したと考えられている。[2]そして、雅平本だけは、未だその位置づけがはっきりとなされていない。

雅平本以外の三系統の業平集は、詞書・配列・収録歌などに共通点を見出すことができるが、一方の雅平本には特異な点が多い。

まず、詞書は、全般的に見ると、三系統とも古今集に最も似てい

る。一方の雅平本は、古今集に似ているものもあるが、伊勢物語に似ているものが多い。

また、雅平本以外の三系統の配列は、必ずしも古今集の歌序と同じではないが、雅平本のように伊勢物語の章段構成を守っているわけではない。[3]

収録歌については、雅平本以外の三系統が、例外一首[4]を除いて、古今集業平歌を全て採っているのに対し、雅平本は古今集業平歌を三首欠いている。

つまり、その形態が古今集・伊勢物語のどちらに近いかという範囲内では、雅平本以外の三系統は古今集、雅平本は伊勢物語に近い

〈表　1〉

雅平本	古今集	後撰集	伊勢物語	在中将集	雅平本	古今集	後撰集	伊勢物語	在中将集
1	294		106	18	35	871		76	1
2	349		97		36	879		88	55
3	(645)			48	37			94	33
4	646		69	49	38			10	14
5				17	39				15
6	969		48	65	40			67	34
7		891			41			68	67
8		(892)			42	632		5	47
9		1083	59	78	43	(617)			25
10		1125		73	44	618		107	26
11				69	45	705			61
12			16	70	46	53			4
13					47	418		82	45
14			102	71	48	(419)			46
15	622		25	51	49	884			56
16	644		103	50	50	970		83	60
17	(706)		47	35	51			85	68
18	707			36	52	(900)		84	57
19	(784)		19	52	53	901			58
20	785			53	54			86	76
21	(62)		17	2	55	616		2	7
22	63			3	56			83	31
23	410			80	57	868		41	54
24			9	66	58			42	75
25	411			81	59		252	45	10
26			39	42	60			46	30
27					61			1	77
28			87		62	(724)			
29	923			59	63			93	16
30				72	64			101	32
31		1244	66	97	65	133		80	5
32			40	74	66			81	41
33					67			18	
34	747		4	37	68	861		125	82

※なお，雅平本35・68は，大和物語161・165段と対応する。
※古今集・後撰集の（　）は非業平歌。

と言える。

では、以上のことを、具体例を示しながら確かめてみようと思う。

〈表1〉は、雅平本と古今集・後撰集・伊勢物語・在中将集の対応表である。例外三首（7―8・10）[5]を除いた全ての歌が伊勢物語に存すること、伊勢物語の同一章段に含まれる歌を分散して載せることなしに（83段のみ例外）配列していることなど、雅平本と伊勢物語の強い結びつきが窺われる。

また、雅平本と在中将集の配列が著しく異なっていることがわかる。これが、在中将集と西本願寺本系業平集だと、その配列に極めて強い共通性を見出すことができる。なお、歌仙家集本系業平集と西本願寺本系業平集では、在中将集と西本願寺本系業平集ほどの配列の共通性は見られないものの、その収録歌の共通性から、歌仙家集本系業平集は西本願寺本系業平集から贈答の相手の歌を省略して成ったものであると考えられている。

以上、雅平本以外の三系統のうち、主に在中将集を例にとって比較したが、三系統が必ずどこかに共通点をもっているのに対し、雅平本の形態は特異である。

〈表2〉は、雅平本と、これに対応する在中将集・古今集・伊勢物語の対照表である。これによって、詞書レベルにまで立ち入って雅平本と伊勢物語・在中将集と古今集の関係を考えてみようと思う。

雅平本46～49は、伊勢物語82段に対応する歌群であるが、雅平本が伊勢物語の章段構成にもとづいて配列されていることがわかる。一方の在中将集は、伊勢物語ではなく、古今集に近い配列になっている。すなわち、古今集では53・418―419・884となっているが、在中将集も同様に4・45―46・56と、古今集と似たような形で分散して収録されているのである。

このように、配列を見ただけでも、雅平本は伊勢物語、在中将集は古今集に近い形態であるということがわかるが、これは詞書についても言えることである。大まかに見ただけでも、在中将集と古今集の詞書は酷似している。

しかし、一方の雅平本については、一瞥しただけでは、その関係がわからない。そもそも、古今集と伊勢物語は、長短の差こそあれ、原則としてその詞書と地の文の内容が全く異なるというものではないからである。

そこで、より細部に目を向ける必要が生じる。具体的には、古今集53・418―419・884と伊勢物語82段を比べ、伊勢物語になく古今集のみにある語句・古今集になく伊勢物語のみにある語句を摘出・分類し、それが雅平本46～49・在中将集4・45―46・56にどのように存するかを調べてみた。

すると、古今集特有の語句は在中将集45・56にしかなく、伊勢物語特有の語句は雅平本46・47にしかないという結果が得られた。

すなわち、在中将集45の「心」、56の「これたかのみこのともにかりしにまかりて」・「おり」などは、古今集418・884とのみ共通し、一方、雅平本46の「これたかのみこ」・「おはしたりしに」、47の「御ともなる人、さけをかめに入れてもたせてまいれり、ところをもとむるに」などは、伊勢物語82段とのみ共通するのである。

つまり、在中将集4・45―46・56は古今集53・418―419・884、雅平本46～49は伊勢物語82段と、それぞれ密接な関係にあると考えられ

〈表　2〉

雅平本業平集	在中将集	古今集（伊達本）	伊勢物語82段（天福本）
これたかのみこ、なきさの院といふところに、さくらのはなみにおはしたりしに 46よの中にたえてさくらのさかさらはは（なかりせ）るのこゝろはのとけからまし このかへさに、御ともなる人、さけをかめに入てもたせてまいれり、ところをもとむるにあまのかはといふところにいたりて、そこのなをたいにてよめとありしかは 47かりくらしたなはたつめにやとからむあまのかはらにわれはきにけり またその御ともなりし人、かへし 48ひとゝせにひとたひきますきみまてはやとかすひともあらしとそお	なきさの院にてさくらの花を 4世中にたえて桜のなかりせはは（なかりせ）るの心はのどけからまし これたかのみこ、かりしてあまの河にいたるといふ心よめと侍けれは 45かりくらしたなはたつめにやとからむあまのかはらに我はきにけり みこ、返〳〵めてたまひて、返しえし給はさりけれは、御ともにありけるきのありつね	なぎさの院にてさくらを見てよめる　在原業平朝臣 53世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし これたかのみこのともにかりにまかりける時に、あまの河といふ所の河のほとりにおりゐてさけなどのみけるついでに、みこのいひけらく、かりしてあまのかはらにいたるといふ心をよみてさかづきはさせといひければよめる　在原なりひらの朝臣 418かりくらしたなばたつめにやどからむあまのかはらに我はきにけり みこのうたを返す返すよみつつ返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる　きのありつね 419ひとゝせにひとたびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思	むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒を飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり、馬の頭なりける人のよめる。 世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし となむよみたりける。また人の歌、 散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき とて、その木のもとは立ちてかへるに日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて、野よりいで来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まゐる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて

もふ

かくてこの宮かへりたまて、さけなとのみてあそふほとに、みこゑひていり給なむとすれは

49あかなくにまたきもつきのかくるゝかやまのはにけていれすもあらなん

46ひとゝせにひとたひきますきみまてはやとかす人もあらしとそ思ふ

これたかのみこのともにかりしにまかりて、かへりて、夜ひとよさけのみし物かたりしけるに、十一日の月いりなむとしけるおり、みこゑひていりなむとしければ

56あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなむ

ふ

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりて夜ひとよさけをのみ物がたりをしけるに、十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてうちへいりなむとしければよみ侍りける

なりひらの朝臣

884あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ

盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひとともにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

親王にかはりたてまつりて、紀有常、

おしなべて峰もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを

るのである。なお、このような関係は、在中将集・雅平本の全てに当てはまるわけではないが（これについては後述する）、おおむね、こうした傾向は両集に見られるものである。

ちなみに、西本願寺本系業平集の詞書は、古今集・後撰集所載の歌にしかなく、古今集所載の歌に関しては、やはり、詞書も古今集に似ている。また、歌仙家集本系業平集には詞書が一例しかないが、[6]これもまた古今集に似ている。

つまり、詞書に関しても、概して、雅平本は伊勢物語、それ以外の三系統は古今集に似ていると言えそうである。

そして、各集編纂における資料としても、雅平本は伊勢物語、それ以外の三系統は古今集を、重要視していたと考えられる。

三　在中将集の詞書

ただし、前節で述べたのはあくまでも概要であり、以下、その詞

書の細部にまで注目して、他撰家集の詞書の生成過程およびその資料との関係について考えてみようと思う。

そこで、雅平本の前に、まず、その撰集資料がはっきりわかっている在中将集の詞書から見てみようと思う。

在中将集の成立に関しては、その詞書・配列の共通性から、西本願寺本系業平集から祖本在中将集が派生したと考えられている。(7)

ただし、西本願寺本系業平集においては、古今集・後撰集所載の歌にのみ詞書があるが、その全てに詞書があるというわけではなく、古今集・後撰集所載の歌でも詞書のない歌がある。しかし、在中将集には、それらの歌にも古今集・後撰集に近い詞書があるのである（編者が古今集・後撰集を見て補ったと考えられる）。また、古今集・後撰集に近い西本願寺本系業平集の詞書を、それ以外の資料（大和物語あるいはその原資料）によって改めている場合もある。

つまり、祖本在中将集の詞書が生成されるに際しては、多種多様な資料、すなわち、先行業平集（西本願寺本系業平集）・古今集・後撰集・伊勢物語・大和物語あるいはその原資料などが、編者の手元にあったと考えられる。

〈表3〉は、在中将集48—49と、これに対応する西本願寺本23—24・雅平本3—4の対照表である（歌仙家集本系業平集は返歌のみで詞書はない）。(8) なお、この贈答歌は、古今集645—646・伊勢物語69段と対応する（引用は省略する）。

西本願寺本23—24が何を資料にしたかは断言できないが、祖本在中将集が西本願寺本系業平集を資料にしていることは、先学諸氏の御指摘どおり、(9) 確かであろう。それは、この在中将集48—49にも当てはまると思われる。

古今集645—646・伊勢物語69段は伊勢斎宮との密通を扱った話で、両者とも長大な情報を有するにもかかわらず、西本願寺本23—24の詞書は極めて簡単である。しかし、在中将集48—49の詞書は、それよりやや詳しくなる。

では、その増補された箇所はどのような資料から採られたのであろうか。

在中将集48の「いみしうわりなくてあひたる女」は、古今集・伊勢物語・雅平本のいずれを資料に想定しても生成可能である。しか

〈表3〉

在中将集	西本願寺本業平集	雅平本業平集
いみしうわりなくてあひたる女 48きみやこし我やゆきけむおもほえす夢かうつゝかねてかさめてか おとこ、いたくないて返し 49かきくらす心のやみにまどひにき世人ゆめうつゝとはこよひさためよ	あるひと 23（三句・おぼつかな） かへし 24（五句・よひとさだめよ）	ええふましき女、みつからきて、ものなといひてかへりにしつとめて、これよりはひとやるへきすへもなくて、なかめしほとに、女のもとよりかくいひたりき 3（三句　おほつかな） そのかへし 4（五句・よひとさだめよ）

し、在中将集49の「おとこ、いたくないて返し」は、伊勢物語にしか典拠を考えられない。古今集645・雅平本4は「返し」・「そのかへし」となっており、伊勢物語69段のみが「男いといたう泣きてよめる」となっているのである。おそらく、この贈答歌の詞書は、西本願寺本系業平集をもとに、伊勢物語または伊勢物語を資料にした先行業平集による潤色が加えられて生成されたと考えられる。

これを換言すれば、古今集・伊勢物語では長大な情報を有するにもかかわらず、在中将集48—49の詞書が比較的簡単なのは、祖本在中将集がもともと簡単な西本願寺本系業平集のうえに生成されねばならなかった、つまり、先行業平集（西本願寺本系業平集）に拘束されていたとも言えるであろう。

他撰家集の編纂に際して（在中将集・雅平本も他撰と考えられる）、多種多様な資料が集められたことは当然考えられる。まして、伝承の人物として有名な業平については言わずもがなであろう。

ただし、その家集の詞書を決定する場合、ある歌に関しては資料Aの詞書（その資料が歌物語であれば地の文）を採用し、またある歌に関しては資料Bの詞書（あるいは地の文）を採用するといった、単純な操作ばかりが行われたわけではない。資料AとBを混合したような、複数の資料にもとづいて生成された詞書もあるのである。

詞書の資料が一種しかないというのは、考えてみれば大まかすぎるのではないであろうか。業平ともなれば、その資料はいくらでもあったはずである。編者が、それらの資料を見比べ、時として、混合して新たな詞書を創作したことも、当然あったと思われるのである。

これを譬えるなら、先行業平集という地金のうえに、参考資料による潤色・改変という鍍金が施されたと言えるであろう。ただし、地金をそのまま活かす場合もあれば、全面的に鍍金してしまう場合もあるわけである。

四　雅平本業平集の詞書

それは、雅平本に、より顕著に見られる。

〈表4〉の雅平本6は、古今集939・伊勢物語48段と対応する。ちなみに、これに対応する在中将集65・西本願寺本40の詞書は、古今集969に似ている。

雅平本6の詞書は、全体的に、古今集939に似ている。伊勢物語48段には、紀利貞が阿波介になったことが記されていない。雅平本6にこの箇所があるのは、おそらく、古今集または古今集を資料にした先行業平集によったためと考えられる。

しかし、その細部を見ると、伊勢物語48段の「人を待ちけるに、来ざりければ」に相当する箇所が、雅平本6の詞書中にも見られるのである（「まちしに」・「こざりしかは」）。この箇所は古今集939・在中将集65・西本願寺本40（「こざりければ」はある）[10]にはない。

前述の在中将集48—49と同様、雅平本6の詞書が生成される過程には、古今集または古今集を資料にした先行業平集の他に、伊勢物語または伊勢物語を資料にした先行業平集も参考にされていたと考えられるのである。そうでなければ、古今集969・在中将集65・西本願寺本40の詞書にない語句が雅平本6にだけあるということの説明がつかない。

〈表4〉の雅平本55も、やはり、伊勢物語2段による潤色をうけ

〈表　4〉

雅平本業平集	在中将集	古今集（伊達本）	伊勢物語（天福本）
きのとしさた、あはのすけになりて、くたりしむまのはなむけせむとてまちしに、こゝかしこにありきけるほとに、ひさしうこさりしかは、やりし 6いまそしるくるしきものとひとまたむさとをはかれすとふへかりけり ある女の、この京にありしに、やよひのついたちころ、あめふりしにやりし 55おきもせすねもせてよるをあかしてははるのものとてなかめくらしつ	紀のとしさたか阿波介になりてまかりける時、銭せむとてまかれりけるに、こゝかしことありきて、夜ふくるまてかへらさりけれは 65（同上） やよひのついたちころ、雨ふる日、人の許に 7（二句・ねもせてよるを）	紀のとしさだが阿波のすけにまかりける時に、むまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時に、ここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしけるなりひらの朝臣 969（同上） やよひのついたちよりしのびに人にものらいひてのちに、雨のそほふりけるによみてつかはしける 616（二句・ねもせてよるを）	48段 むかし、男ありけり。馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、来ざりければ、（同上） 2段 むかし、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まださだまざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男、うち物語らひて、かへりきて、いかが思ひけむ、時は三日のついたち、雨そほふるにやりける。（二句・ねもせてよるを）

ている。雅平本55の「この京にありしに」という箇所は、古今集616・在中将集7（西本願寺本には詞書がない）[11]にはなく、伊勢物語の「この京は……」という箇所またはこの箇所を採った先行業平集から採られたとしか考えられない。[12]いずれにしても、雅平本55の詞書については、複数の資料を混合して生成されたと考えられる。

雅本平55の詞書は、伊勢物語からだけでは生成不可能であろう。もし古今集または古今集を資料にした先行業平集と無関係にこの詞書が生成されたとすれば、長大な情報を有する伊勢物語2段の内容が古今集616・在中将集7と同程度の長さに収まっていることの説明がつかない。

それは、前述の〈表2〉の雅平本46についても当てはまる。伊勢物語段82では長大な情報を有するのに、雅平本46の詞書の情報量

は、「これたかのみこ」・「おはしたりしに」を除けば、古今集53・在中将集4（西本願寺本4の詞書は在中将集4と同じ）とほぼ同じなのである。やはり、伊勢物語だけを資料に、それを要約したとは考え難いのである。

〈表4〉の雅平本55・〈表2〉の雅平本46に見られるこのような現象は、前述の在中将集48―49と同様、先行業平集の拘束をうけたと考えることもできる。無理に一種の資料から要約されたと考えるより、こう考える方が、より自然に思われるのである。

五　雅平本業平集編纂における先行業平集の存在

祖本雅平本編纂[13]において、古今集・後撰集・伊勢物語が資料になったことは想像に難くない（ただし、古今集については若干問題が残るので後述する）。そして、これら以外の資料として、先行業平集の存在も、可能性としては十分考えられる。

では、その先行業平集とはどのようなものなのであろうか。

結論から先に言えば、その先行業平集を知る手がかりは在中将集にありそうである。

〈表5〉に、在中将集と雅平本の詞書が似ている例をあげた。雅平本36の「月をみて」という詞書は、古今集879（877に続いて題不知歌）・西本願寺本30にはなく、在中将集55に全く同じ形で存する。ただし、雅平本36または在中将集55の詞書の根源的な資料は、伊勢物語（88段に「……月を見て……」とある）と考えられる。

雅平本1の詞書は、古今集294（293の詞書から続いている）とも似ているが、在中将集18に最も似ている。ちなみに、この歌に対応する伊勢物語106段は全く別の内容で、この問題に関係があるとは考えられない。

両集の類似は、具体的には、「きこえし時」・「所」といった箇所に見られる。そして、何よりも、古今集の「かたをかけりけるを題にてよめる」という箇所が両集にないのである。なお、両集の細部が微妙に異なるのは、それぞれの編纂の際に改められたからと思われる。

さて、両集のこのような類似は、前述の〈表4〉の雅平本6についても当てはまる。古今集969の「けふといひおくれりける時に」・「まかり」という箇所が、やはり、雅平本6・在中将集65にはなく（西本願寺本40にはある）、「なりて」という箇所が共通する。

同様に、〈表4〉の雅平本55・在中将集7には、古今集616の「しのびに人にものらいひてのちに」・「そほ」という箇所がなく、「ころ」という箇所が共通する。

しかも、雅平本と在中将集の詞書の語句の類似は随所に見られるのである（先頃渡辺泰宏氏が類似箇所を九例ほど指摘されたので[14]、例証は省略する）。

とすると、雅平本系業平集と在中将集系業平集の共通資料Xがあったと仮定できるであろう。ただし、その共通資料Xが雅平本系業平集であるとすれば、結果的に、雅平本系業平集が在中将集系業平集の資料になったということになり、逆に、共通資料Xが在中将集系業平集であるとすれば、在中将集系業平集が雅平本系業平集の資料になったということになるだけである。

しかし、現時点でそこまで断言するのは危険であろう。本稿では、共通資料Xについては、雅平本に近い詞書の先行業平集または

〈表 5〉

雅平本業平集	在中将集	古今集（伊達本）	伊勢物語（天福本）
36 おほかたは月をもめてしこれ そこのつもれはひとのおいとなるもの	55（二句・月をもめてし／五句・おいとなる物） 月を見て	877（歌略）題しらず よみ人しらず 878（歌略）なりひらの朝臣 879（二句・月をもめでじ／五句・おいとなるもの）	88段 むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、それがなかにひとり、（二句・月をもめでじ／五句・老いとなるもの）
二条中宮の、東宮女御ときこえし時に、御屏風に、たつた河に紅葉なかれたる所 1 千はやふるかみよもきかすたつた河からくれなゐに水くゝるとは	二条のきさいの宮、みやす所ときこえし時の屏風のゐに、たつた河にもみちなかるゝ所 18（二句・神世もきかず）	二条の后の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風にたつた河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題にてよめる そせい 293（歌略）なりひらの朝臣 294（二句・神世もきかず）	106段 むかし、男、親王たちの遊したまふ所にまうでて、龍田河のほとりにて、（二句・神代を聞かず）

在中将集に近い詞書の先行業平集（その配列や歌数については、今のところ何とも言えない）という範囲内で考えてみようと思う。

では、まず、共通資料Xを雅平本に近い詞書の先行業平集と仮定してみよう。雅平本に近い詞書というのは、たとえば、〈表4〉の雅平本6・55のような、伊勢物語によって潤色された語句を含む詞書である。

もし共通資料Xを雅平本に近い詞書の先行業平集とすれば、雅平本系業平集への流れは問題ないが、在中将集系業平集への流れが問題となる。すなわち、〈表4〉の雅平本6・55に対応する在中将集65・7の詞書が生成されるには、次のような複雑な過程を考えなければならなくなる。

つまり、在中将集65・7には伊勢物語による潤色部分がないが、もし雅平本6・55のような詞書が資料にされたとすれば、祖本在中将集の編者が、古今集を参照しながら、その伊勢物語による潤色部分を削除して、古今集に近い形に修正するという、極めて複雑な操作を行ったと考えねばならない。しかし、全般的に見るかぎり、そのような複雑な操作が行われたとは考え難く、やはり、祖本在中将集の詞書については、古今集または古今集に近い詞書の先行業平集

（西本願寺本系業平集）だけから生成されたと考えるのが自然なように思われる。

すると、共通資料Xが在中将集に近い詞書の先行業平集であった可能性の方が高いように思えてくる。

共通資料Xが在中将集に近い詞書の先行業平集であったとすれば、問題となるのは雅平本系業平集への流れだけになるが、これはごく自然に説明できる。すなわち、祖本在中将集の編者は、古今集とそれほど変らないような、在中将集に近い詞書のうえに、伊勢物語による潤色を行ったと考えればよいであろう。このような現象は、第三・四節で見たとおり、十分あり得ることである。

つまり、詞書の生成という点から判断すると、雅平本と在中将集の共通資料Xは、雅平本に近い詞書の先行業平集よりも、在中将集に近い詞書の先行業平集と考える方が蓋然性が高いように思われるのである。

なお、雅平本の詞書の多くは伊勢物語に似ているが、古今集に似ている詞書もある。そして、その古今集に似ている詞書は、実は、〈表5〉の雅平本1のように、古今集よりも、古今集を資料にした、在中将集に近い詞書の先行業平集から採られたと考えた方がいい場合が多い。

しかし、雅平本16・25・43・68の詞書だけは、明らかに、在中将集（50・81・25・82）や西本願寺本（25・57・13・58）よりも、古今集（644・411・617・861）に似ている（引用は省略する）。

つまり、祖本雅平本の編者は、他の業平集の編者ほどに古今集を最重視したわけではないが、適宜、古今集も参照し、その詞書を全面的に採用することもあったと考えられるのである。

六　編者の統一意識による詞書の改変

さて、以上は、あくまでも、編者がいかなる資料をどのように扱ったかという視点から、雅平本の詞書の生成過程を考えたものである。これを換言すれば、資料との関係を中心に置いた編纂態度の考察であったと言えるであろう。

そこで、今度は、資料とのかかわりと全く離れた次元で、集全体の体裁を整えようとする編者の意図を考えながら、雅平本の詞書を見てみようと思う。

既に片桐洋一氏が指摘されているが、[15] 雅平本には、一人称的な立場の過去の助動詞「き」が頻用されている。しかし、雅平本の資料になったと思われる古今集・後撰集・伊勢物語・それに在中将集（在中将集そのものとまでは断定しないが、在中将集に近い詞書の先行業平集が資料になったと考えられる）などには、三人称的立場の過去の助動詞「けり」が用いられている。すなわち、雅平本の詞書は、あたかも実体験のように仕立てるためにわざわざ一人称的表現に改められていると考えられるのである。

この例だけを見ても、編者がいかに集全体の体裁を整え統一を図ろうとしていたかがわかるが、このような統一意識は、次のような例からも窺い知ることができる。

雅平本9・23・31の詞書には、「よのなか……かりしころ」という定まった形式の語句がある。そこで、その資料になった可能性のある後撰集・伊勢物語・在中将集にこれと似たような表現の語句を求め、比較を試みた。

まず、雅平本9の「よのなかのこゝろうかりしころ」の場合、後

撰集1083は「世中を思ひうじて侍りけるころ」となっており、意味は同じでも形式・表現が異なる。

雅平本23の「よのなかむつかしかりしころ」は、伊勢物語9段の「身をえうなき物に思ひなして」という箇所が資料になっていると思われるが、やはり、形式・表現が異なる。

雅平本31の「よのなかこゝろうかりしころ」も、後撰集1244・在中将集79の「身のうれへ侍りける時」とは形式・表現が異なっているのである。

つまり、雅平本の詞書における「よのなか……かりしころ」という語句は、似たような内容ならば形式を統一しようという編者の創意（統一意識）によるものと言えるであろう。

また、雅平本の詞書には、その資料にはなかったと思われる接続詞「また」（14・48）や指示語「この」（30・33・47・49・50）などの語句が見られるが（引用は省略する）、これらの語句のおかげで、結果的に歌同士の接続が滑らかになっている。やはり、これも、集全体の体裁を整えようとする編者の統一意識のあらわれと考えられる。

このようにして考えてみると、雅平本の詞書がその典拠資料や他の三系統の業平集に比べて特異なのは、複数の資料を混合して詞書が生成されたということばかりが原因になっているのではなく、編者が独自の創意によって詞書を改変したということも関係しているのではないかと思われるのである。

七　結び

雅平本以外の業平集の詞書は、おおむね、何らかの資料（古今集・後撰集・伊勢物語などのうちのいずれか）に似ている。

しかし、雅平本の詞書には、古今集にも伊勢物語にも似ているという特徴が多く見られる。祖本雅平本の詞書が生成される際、前節で述べたような編者の創意が介在したことを十分考慮に入れても、これほどまでに一貫性がないのは不可解である。本稿の出発点はそこにあった。

そこで、雅平本の詞書が生成されるに際して用いられた資料を考えてみた。すると、従来考えられてきた古今集・後撰集・伊勢物語などの資料の他に、在中将集に近い詞書の先行業平集の存在が確認された。

その先行業平集の詞書は古今集に似ている。つまり、雅平本のうちで古今集にも伊勢物語にも似ている詞書は、実は、古今集ではなく、古今集に近い詞書の先行業平集（在中将集に近い詞書のもの）をもとに、伊勢物語によって潤色されたと考えられるのである。

また、祖本雅平本の資料になった在中将集に近い詞書の先行業平集をはじめ、西本願寺本系業平集、あるいは、当時既に成立していたかどうかは不明であるが、在中将集系業平集・歌仙家集本系業平集などは、全て古今集的色彩の強い業平集であるのに対し、雅平本だけは極めて伊勢物語的色彩が強い。

業平歌の資料としては、古今集・後撰集などの勅撰集と伊勢物語が双璧であったと思われるが、やはり、正統性の高い勅撰集の方が重んじられたと考えられる。しかし、伊勢物語は、完全に無視できるほどの小さな存在ではなかったはずである。かなり大胆な言い方をすれば、雅平本は、古今集的な先行業平集に対抗して（それまで比較的軽んじられてきた伊勢物語の方に重きを置いて）編纂された

伊勢物語的な業平集と言えるかもしれない。

そこまで言わないにしても、祖本雅平本編纂において最も重視されたのが伊勢物語と在中将集に近い詞書の先行業平集の二資料であったということは確かなことと考えられる。雅平本において当時の第一級資料であったはずの古今集・後撰集がそれほど重視されていないという現象は、このように考える以外、説明がつかないであろう。

なお、既に山田清市氏は、

雅平本は在中（私注―在中将集）にもとづきながら、就中、伊勢物語関係歌をその形態に統一するために、改編されたものではないか

と推定されている。[16]

山田氏の御説の論拠は、雅平本と在中将集の共通歌の多さという点にある。ちなみに、在中将集になく雅平本だけにある歌は九首（山田氏は、これらの歌は伊勢物語・後撰集などから補入されたと考えておられる）[17]、雅平本になく在中将集にだけある歌は二十三首である（また、これらの歌については、特に明記されていないが、抄出の撰に漏れたと考えておられるようである）[18]。

第五節で述べたとおり、祖本雅平本の資料として、在中将集に近い詞書の先行業平集があったことは確かである。ということは、在中将集そのものとは断定しないまでも、[19]在中将集系業平集が資料になった可能性は十分あると考えられる。そして、その詞書が伊勢物語によって潤色されていることも前述のとおりである。

私は山田氏の方法に必ずしも全面的に賛同するものではないが、本稿において考察したとおり、共通歌の多さからだけでなく、詞書の類似から考えてみても、その可能性は決して低いものではないと思われるのである。

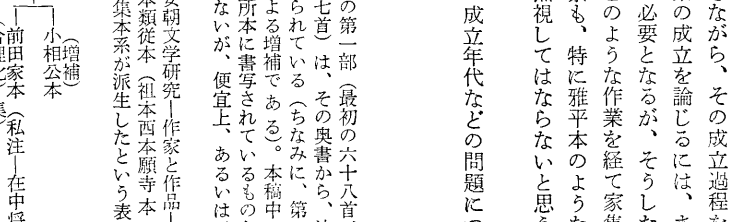
以上、本稿は雅平本業平集という一他撰家集についての考察であったが、編纂態度という視点に重点を置きながら、その成立過程を考えたつもりである。すなわち、他撰家集の成立を論じるには、まず第一に何が資料になったかを知ることが必要となるが、そうしたハード面からだけでなく、その資料からどのような作業を経て家集が編纂されたかというソフト面からの考察も、特に雅平本のような複雑な成立過程をもつ家集については、無視してはならないと思うのである。

なお、伊勢物語の成立との関係・配列・成立年代などの問題については、いずれ稿を改めて考えてみたい。

注

1　宮内庁書陵部蔵御所本業平集（510・12）の第一部（最初の六十八首、ただし、一首脱落しているので実際は六十七首）は、その奥書から、法性寺少将雅平本を書写したものであると知られている（ちなみに、第二部は三条三位入道本、第三部は小相公本による増補である）。本稿中で用いる「雅平本業平集」の呼称は、その御所本に書写されているものをそう呼ぶだけのことで、必ずしも正確ではないが、便宜上、あるいは、通例に従ってこのような表現を用いる。

2　井川健司氏「現存本業平集の成立」（『平安朝文学研究―作家と作品―』昭46・3　有精堂）。なお、井川氏は、祖本類従本（祖本西本願寺本に同じ）系から祖本在中将集系・祖本歌仙家集本系が派生したという表現を用いられている。



ちなみに、雅平本と在中将集（前田家本）は孤本である。

3　渡辺泰宏氏は、「在中将集・雅平本業平集考―その性格と伊勢物語の成立に関する試論―」（「国語と国文学」昭58・12）において、雅平本の配列が小式部内侍本伊勢物語（符の使の段からはじまる非初冠本）の段序に近いことを指摘された。

4　古今集349。筋切・元永本をはじめ、行平の歌としている伝本も多く、三系統とも行平作としている古今集によったと考えられる。

5　これに雅平本9を加えた四首は全て後撰集の歌で、まとめて配列されているうえに（〈表1〉参照）、詞書も後撰集に似ているので、この歌群は伊勢物語よりも後撰集と密接な関係にあったと考えられる。

6　歌仙家集本4。古今集133の歌。

7　前掲2論文によれば、西本願寺本系業平集（井川氏は「祖本類従本系」と呼ばれている）を増補した祖本在中将集がまずあり、それを合理化したものが在中将集であるという。

8　以下、特に注記しないかぎり、歌仙家集本系業平集には詞書がないものとする。

9　特に渡辺泰宏氏は、前掲3論文において、配列だけでなく詞書の共通性から、両集の関係を明らかにされている。

10　在中将集にないのは、古今集を以て修正されたからと考えられる。なお、こうした例は他にも見られる。

11　以下、特に注記しないかぎり、西本願寺本には詞書がないものとする。

12　既に片桐洋一氏（『伊勢物語の研究〔研究編〕』昭43・2　明治書院144頁）は、この詞書を引用され、雅平本が伊勢物語によっていることを説かれている。片桐氏の御言葉を借りれば、

もし伊勢物語に関係ないとすれば、雅平本の「この京にありしに」がまったく意味のないものになる。「奈良の京は離れ」（私注―伊勢物語2段）とあればこそ「この京」という表現が存在するのである。雅平本は虚構化された伊勢物語によりつつ、しかも詞書を簡単にし、一人称にしているのである。

ということになる。

13　雅平本についても、雅平本そのものが雅平本系業平集の祖本とは断定できないため、在中将集の場合と同様、一応、祖本雅平本を想定しておく。

14　「在中将集考―その性格と成立に関する試論―」（「文学・語学」昭62・3）。ちなみに、渡辺氏は「原小相公本（私注―本稿で言う祖本在中将集に相当する）が雅平本を参考とした」と考えておられる。

15　前掲12書　145頁。

16　『伊勢物語の成立と伝本の研究』昭47・4　桜楓社　477頁。

17　これらのうち、雅平本7―8の二首は後撰集（891―892）からの補入と考えられるが（前掲5参照）、それ以外の七首は、古今集（前掲4参照）または伊勢物語では、いずれも業平（主人公）と直接関係がないと判別できるものである。これらの歌が在中将集にないのは、このことを在中将集の編者が知っていたからと考えられる（雅平本や小相公本と比べると、在中将集には、非業平歌を削除しようとする編者の意図が強く感じられる）。ちなみに、在中将集と同じ系統に属すと考えられる小相公本には、雅平本に付された合点注記（／）によって、このうちの三首（雅平本2・27・62の歌）があったことが確認される。もし小相公本を基準にして考えれば、雅平本特有歌は四首となり、さらに少なくなる。しかも、御所本の合点注記には付け忘れもあったと考えられ、必ずしも全てに正しく付されているとかぎらないので（橋本不美男氏『原典をめざして―古典文字のための書誌―』昭49・7　笠間書院　216頁）、雅平本特有歌はもっと少なくなるかもしれない。しかし、いずれにしても、祖本雅平本編纂における資料は在中将集に近い詞書の先行業平集だけではなかったと考えられるから、これらの雅平本特有歌については、先行業平集以外の伊勢物語などの資料から採られたと考えれば済むことであろう。

18　私としては、山田氏のように雅平本の殆ど全ての歌が在中将集にもとづくとまでは断言できない。ただ、先行業平集の形態を重視し、それをできるかぎり活かそうとした祖本在中将集編纂の場合とちがい、祖本雅平本編纂の場合は、主に伊勢物語・先行業平集の二資料を見比べながら、先行業平集とは全く異質な（どちらかといえば伊勢物語の方に近い）形態の作品を創ろうとしたわけであるから、その成立事情は祖本在中将集と同じではない。それゆえ、祖本雅平本の編者を祖本在中将集の編者と同レベルで考え、先行業平集の歌が多く漏れていることを根拠に在中将集系業平集→祖本雅平本という流れを否定しようとする反対論には、無理を感じるのである（つまり、雅平本は、先行業平集にない歌でも伊勢物語から採っているために、先行業平集に対し広本的性格をもち、と同

時に、先行業平集を抄出しているために、これに対し略本的性格も併せもっていると考えられるのである）。

19　雅平本と在中将集の共通歌の多さに論拠を置く山田氏の御説をとりあげ、私自身もその立場に立って、前掲17・18のような考察を行ったのであるが、これは、あくまでも、在中将集に近い詞書の先行業平集の候補として在中将集あるいは小相公本も考えられなくはないからのことであって、決して在中将集や小相公本そのものが祖本雅平本の資料になったと言いたいわけではない。ただ、祖本雅平本の資料になった先行業平集が在中将集系である可能性は十分あり、もしそうであると仮定した場合、特有歌が問題となるので、その解釈を示しただけのことである。

付記1

現在、伊勢物語の成立を三段階にわけて考える説が有力となっているが、この説は、第二段階において、雅平本と在中将集が全く無関係に成立したことを前提としている。すなわち、全く別々に成立したはずの両集の伊勢物語収録歌が奇しくも殆ど共通するのは、当時の伊勢物語がその共通する章段のみから成る程度の規模であったからというものである（片桐氏注12書　160頁以下）。

伊勢物語が成長していったという点に関しては私も賛同しているが、本稿で考察したとおり、両集には、直接とは言わないまでも、間接的に関係があったことは大いに考えられる。

すると、両集の収録章段の多くが一致したとしても、一方が一方を参考にしているわけであるから、それは十分あり得ることと言える（これについては、既に山田氏が注16書において言及されている）。ゆえに、この説の方法に関しては、若干、再検討の余地があるように思われる。

ただし、この説については、様々な角度から論証が試みられており、また、本稿によって第二次伊勢物語の存在を否定し得たわけでもない（ただ、わずかばかりの危険性を述べたにすぎない）ので、説自体に対する考察は控えたいと思う。

付記2

本稿のもとになっているのは昭和61年度慶応義塾大学大学院「中古国文学特殊講義」において提出したレポートであるが、以来御指導いただいた西村亨先生に、厚く御礼申しあげる。